



Title	長城の光景 : 『今昔物語集』の始皇帝説話を窓にして
Author(s)	大村, 誠一郎
Citation	詞林. 1996, 20, p. 15-23
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/67387">https://doi.org/10.18910/67387</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 長城の光景

—「今昔物語集」の始皇帝説話を窓にして—

大村 誠一郎

一 はじめに

「今昔物語集」巻十巻頭の「秦始皇在感楊宮政世語第一」は、震旦部の歴史叙述の始発として注目されてきた話であるが、その標題にも掲げられる咸陽宮の威容は中世において豊かなイメージを喚起し、奇怪ともいえる想像上の光景が様々な文献に描き出されてきたことは、黒田彰氏による「平家物語」と朗詠注の研究によつて明らかにされたことであつた。

「今昔」の咸陽宮の光景も、黒田氏によつて資料の一つとして触れられたところであり、いわゆる中世史記の一環をなすものに位置づけられよう。<sup>1)</sup>

本稿は、その先学の成果に導かれつつ、年代的に先行する「今昔」の咸陽宮の長城にかかわる光景を窓として、その後の展開と、変容の契機について考察を試みるものである。相当地な数にのほる咸陽宮説話の各文献間の依拠関係を明らかに

するものではないが、変容の契機をさぐるることによつて一つの説話の成長と変容の様相を整理できれば、おのずと各文献間の意味的親疎による距離も浮き彫りになっていくのではないかと、という見通しのもとに考察を進めていきたい。

二 「今昔物語集」と「平家物語」との間

「今昔」で具体的に描かれる光景は、後世のものとは異なつて宮殿の背後の長城のみであつて、宮殿自体には筆は及んでいない。宮殿（咸陽宮）については、

始メテ、感楊宮ト云フ宮ヲ造テ、都城トス。其ノ宮ノ東ニ関有リ。感谷関ト伝フ。櫃ノ迫ノ如クナルニ依テ感谷関ト伝フ也。亦、王城ノ北ニハ高キ山ヲ築タリ。此レ、胡国ト震旦トノ間ニ築キ隔タル山也。胡国ノ人ノ可来キ路ヲ防ベキ故也。

とされるだけだ。しかし、ここでは咸陽宮、函谷関、長城の

三つの關係が言われており、後世の本邦の文献が咸陽宮と長城を一連のものとして扱ふ認識を、「今昔」もまた共有しているものと言えよう。原典の「史記」では、長城の建設は蒙恬列伝に記されるが、咸陽宮の造営（「史記」秦始皇本紀）とは別の事業として、一連のものには扱われていない。

さて、その「今昔」では、長城の光景は以下のように描かれる。

震旦ノ方ハ常ノ山ノ如ク也。人登テ遊ブ。遙ニ山ノ頂ニ發テ胡國ノ方ヲ見ルニ、隠ル、所無シ。胡國ノ方ハ高ク直クシテ、壁ヲ塗タル如シ。人登ルニ不能ズ。山ノ東西ノ間、千里也。高キ事、雲ト等シ。然レバ、雁ノ渡ル時、此ノ山ノ高キニ依テ不飛超ズシテ、山ノ中ニ雁ノ通ル許穴ヲ開タルヨリ飛テ通ル也。雁、其ノ習ヲ以テ、虚空ナレドモ一筋ニシテ飛ブ也。

わずかな叙述ではあるが、築城（山）は胡国の侵入に対するものであるという目的や、王城の北に位置して東西一千里に及ぶという地理上の位置と規模が示された上で、「胡國ノ方ハ高ク直クシテ、壁ヲ塗タル如シ。人登ルニ不能ズ」と、胡国に面する方は絶壁となつてゐる様子、またこちら側は「常ノ山」のようだという景観も分かりやすく、まとまりのある記述といえる。そして、築城（山）の高さは雲にも及ぶほどだが、人々はそこへ遊山に出かけることができ、そこからはるかに見渡す胡国の景は「隠ル、所無シ」というのも、

日本とは異なる広大な国土の、のびのびとした雄大な情景を髣髴させるものがあり、異国の情景描写としてそれ自体、注目に値するものにも思われる。

なお、この情景は、今のところ他の文献には見出せない「今昔」の独自記事でもある。「今昔」の記事に近いものとしては覚明撰真福寺本「新樂府略意」巻七の「君不見厲王胡亥煬帝之末年、群臣有利君無利」注があり、次のように言う。

秦始皇帝夢秦國位胡可破、因使蒙恬築万里長城、其山高、大鴻雁不得飛亘、是以胡人不得下南牧馬矣

「今昔」のように山の姿にはふれないものの、山腹に穿たれた雁の飛行のための穴の記事は共通し、胡人に対するものであることも記されている。

さて次に、「今昔」以後の作品における長城の光景の代表として「平家物語」を見てみることにする。「平家物語」や、それと深い関係のある朗詠注における長城の光景は、咸陽宮の描写と一連のものとしてあるが、その「平家物語」や朗詠注の異人間の相違については黒田彰氏<sup>4</sup>、「咸陽宮絵巻」を中心においた伊井春樹氏<sup>5</sup>によつてすでに詳しい整理がなされてゐる。ここではその先学の成果に導かれつつ、「長城」に焦点を絞つて「今昔」と「平家物語」との間について考えたいと思う。

「平家物語」覚一本で長城は、

咸陽宮は、みやこのめぐり一万八千三百八十里につもれり。内裏をば地より三里たかく築あけて、其上に建てたり。長生殿・不老門あり。金をもつて日を作り、銀をもつて月を作れり。真珠のいさご・瑠璃の沙・金の砂をしきみてり。四方にはたかさ四十丈の鉄の築地をつき、殿の上にも同く鉄の網をぞ張たりける。これは眞土の使を入れじとなり。秋の田のもの雁、春はこしちへ帰も飛行自在のさはりあれば、築地には雁門となづけて鉄の門をあけてぞ通しける。そのなかにも阿房殿とて、始皇の常は行幸なつて、政道おこなはせ給ふ殿あり。たかさは三十六丈、東西へ九町、南北へ五町、大床のしたは五丈のはたほこをたてたるが、猶及ばぬ程也。上は瑠璃の瓦をもつてあき、したは金銀にてみがきけり。

(巻五「咸陽宮」)

とされる。ここには咸陽宮内部の様子も描かれるが、傍線を付した部分は長城の光景として「今昔」の記述と対照が可能である。「今昔」では「王城ノ北ニハ高キ山ヲ築タリ」とあつて、それは「山ノ東西ノ間千里」であつた。ところが「平家物語」では、そのような防塞は、「四方にはたかさ四十丈の鉄の築地」に変化しているのがまず注目されよう。山が高いために雁が飛び越えることができないので山腹に穴を開けて雁の通路としたという「今昔」の伝は、その鉄の築地にそっくり移されているのも分かる。

この間の異同については、黒田彰氏の考察に従いたい。氏は、

たとえば、延慶本の、「都の周、一万八千三百八十里ニツモレリ」とするのは一寸変で、これは、註抄に、「秦始皇、築長城。廻り一万八千三百八十里」とあるのが正しく、もと長城の周囲を数えた記述が、例えば国会本朗詠注の、「咸陽宮ハ、秦始皇ノ内裏也。城廻り二万八千三百八十里也」というような、長城を後退させた理解を経て「都ノ周」と「一万八千三百八十里」とが直結せしめられるに至つたのであろう。

と整理されて、明快である。長城は、雁の通る穴をともなつて、宮殿を囲む築地へと場所と姿を変えていった。

三 死を拒否する始皇 飛躍の契機

ここまで、長城の光景について「今昔」から覚一本「平家物語」との異同を概観したが、ここで特に問題にしたいのは、どういう契機をもつて築山の長城が鉄の築地に変化したのかという点である。なぜ、雲をも越える築山は、鉄の築地に変わらねばならなかつたのか。

そこで、鉄の築地そのものに注目してみたいのだが、「平家物語」諸本・朗詠注諸本で描かれる鉄の築地のイメージに近似するものとして、「往生要集」巻上に記される阿鼻地獄

の光景中の阿鼻城の説明は見逃せない。そこには、

かの阿鼻城は、縦広八万由旬にして、七重の鉄城、七層の鉄網あり。下に十八の隔ありて、刀林周り布る。四の角に四の銅の狗あり。身の長四十由旬なり。眼は電の如く、牙は劍の如く、齒は刀の山の如く、舌は鉄の棘の如し。一切の毛穴より皆猛火を出し、その煙臭惡にして世間に喩ふるものなし。十八の獄卒あり。(中略)また七重の城の内には七の鉄幢あり。幢の頭より火の踊るごと、猶し沸れる泉の如く、その炎、流れ進りて、また城の中に満つ。

(原漢文。日本思想大系「源信」所収(昭和45年岩波書店)の訓読による。以下の引用も同じ)

とあつて、「七重の鉄城」と「七重の鉄網」が言われる。阿鼻地獄は六道の最悪所、地獄の中でも最下層、最大の悪所で、「往生要集」の説明を借りれば「大焦熱の下、欲界の最底の処にあり」、「七大地獄と并及に別処の一切の諸苦を、以て一分とせんに、阿鼻地獄は一千倍して勝れり」という苦を受ける、地獄の底である。そこでいわれる「七重の鉄城」と「七重の鉄網」は、墮地獄した者を絶対に逃がさない、いわば一切の通行を閉ざす絶対的な壁を具象化したものといえよう。七重でこそないが、そのイメージを借りたのが、咸陽宮の鉄の築地ではないだろうか。さきに引用した「平家物語」では「殿の上にも同く鉄の網をぞ張たりける」とあつた

が、それは「七層の鉄網」と重なる。阿鼻地獄という苦の絶対的な極地を囲む城は、そこからの脱出ということにおいても絶対的な不可能を暗示するであろうし、その絶対性が、始皇の咸陽宮においては、侵入することの不可能性に転換されたものと見る事ができよう。

さて、地獄の最底の絶対的な脱出不可能性を借りて、絶対的な不可侵性を与えられた鉄の築地と鉄の網を備える咸陽宮であるが、これが何に対するものかといえば、先に引用した覚一本「平家物語」で「冥土の使を入れじとなり」と言われる「冥土の使」がもつともふさわしいと言わねばなるまい。

「冥土の使」は刺客を指すとの注もあるが、文字通りに理解してよいはずだ。黒田彰氏は朗詠注や「平家物語」の咸陽宮の描写を、「史記」始皇本紀でいわれる驪山陵の地下墓室を原拠とし、覚明による醍醐寺本「白氏新樂府注」下「草茫茫」注のような描写を原型と指摘された。その地下の墓室は宮殿のしつらえを持つている。それは始皇が冥土に携えていくものであろうが、彼が死者の世界に行くことを拒否し、死後もそこにとどまることが意図された造営と解されても不自然ではあるまい。まさにそのように解される方向で始皇の死の拒否という明確なモチーフを背景として、驪山の地下墓室の光景に地獄の底にあつた鉄城と鉄の網によるおおいが付加され、「冥土の使」を阻むための現世でなしうる最高の構造物が造型されたのだ。覚一本「平家物語」にいう「長生

殿・不老門」も死を拒否し生に執着する始皇にふさわしい。

死を拒否し生に執着する始皇には、ほかにも「史記」始皇本紀中の、方士徐福にそのかさね、不死の仙薬を求めたためにたくさんの僮男傭女を舟にのせて蓬萊の島に赴かせた話がある。これは白居易の「新樂府」「海漫漫」に詠まれて、権力者が不死に執して勞を厭わないことの空しさをいい、「君看よ驪山の頂上」とうたわれた。まさにそれと同じモチーフが、胡国の侵入を防ぐ長城を、冥土の使を阻む鉄の築地に変化させたとも言えよう。日本の中世における咸陽宮の巨大にして奇怪な光景は、全てを手に入れた権力者が最後に望む不死のためにかけた膨大な費と勞であり、かなわぬ夢にかけた空しさである。

そしてこのような、膨大な物量をともしなう現世的な願望、あるいは永遠に現世にとどまることを願うことの空しさは、まさに現世の無常を説く仏家にとって格好の材料である。鉄の築地の原拠となった鉄城は「往生要集」にあったし、「宝物集」にも「往生要集」からの引用とみられる鉄城の記述があるが、そのような仏教上の知識と漢籍の知識が相互に流動し縫合される唱導の世界において、仏教的なモチーフのもとに、始皇の敵は胡人から冥土の使に変わり、「今昔」のような長城の叙述から「平家物語」や朗詠注で描かれる鉄の築地へと変容していったのであろう。

#### 四 「平家物語」以後

さて、ここまで、「今昔」の長城から「平家物語」の鉄の築地への変化の契機を探り、そこに現世の最高権力者の死の拒否とその空しさという明確なモチーフの存在を確かめたのであるが、鉄の築地の成立時モチーフも、時として見失われかねない危うさに絶えずさらされていたようだ。実のところ鉄の築地の記述は、「平家物語」諸本間、朗詠注諸本間、あるいは他の文献における引用において多くの異同がみられ、かつ安定したものではない。たとえば、延慶本は引用した覚一本とはほぼ同じ内容を持つが、屋代本では鉄の網を欠き、四部本では鉄の築地も鉄の網も欠く。屋代本も四部本も冥土の使には言及しない。長門本は「めいどの使をよせじ」というが、築地はあつても鉄ではなく、鉄の網のことは記されない。「源平盛衰記」は鉄の網の記述を欠くうえに、冥土の使を阻むのではなく、「始皇ハ雷ニ怖給ケレバ、雷ヨリ上ニ栖ントテ、阿房ノ殿ヲバ被造タリ」と別な解釈が生じている。

それでは、ここで長城の光景の変遷をもう一度整理し、「平家」以後も展望してみたい。

まず「今昔」の記述を日本的な変容の始発に位置付けたのだが、それは胡国の侵入を防ぐためのもので、その意味で「史記」の記述を越えることはない。ただこの長城に雁が通

行する穴が穿たれているという理解は「史記」にはない。この「今昔」とほぼ同じ内容をいうものに覚明撰真福寺本「新樂府略意」巻七があることは、先に確かめた。その後の典型として、「平家物語」が語る長城がある。ここでは長城は宮殿を囲む鉄の築地となり、鉄の網を天井に張り、それは外敵に備えるのもちろんであるが、究極の敵として「冥土の使」がいわれ、始皇の死（あるいは死後誰もが受けねばならない冥土の獄卒の裁き）の拒否というモチーフが確認できる。「今昔」でいう築山から鉄の築地への変容にあたっては、その変容の契機として「往生要集」の無間地獄の鉄城と鉄網のおおいの借用を想定したが、そう考えるならば、「今昔」的な長城が「平家物語」の長城に先行し、その逆はありえない。

さらに、「平家物語」内部の諸本における異同、あるいは「平家物語」の長城と酷似する内容もち、「平家物語」と密接な関わりが言われる朗詠注にも触れねばなるまい。たとえば、朗詠注のうち鎌倉中期以前の成立といわれる永済注<sup>11</sup>では、

咸陽宮トイハ、秦ノ始皇のツクリタマヘル宮ナリ。城ノメクリ、一万八千三百八十里ナリ。北ハ雁門ナリ。コノミヤニ長生殿アリ。此殿ニ不老門アリ。金ノ砂十萬斛、瑠璃ノ砂コ十萬斛、真珠ノ砂コ百萬をラシケリ。金ヲモテ日ヲツクリ、銀ヲモテ月ヲツクリテ、仙洞ノサマヲマナヘリキ。（「強呉滅魯」注）

といった説明になっている。先に引用した覚一本「平家物語」に酷似することは明らかだが、鉄の網と「冥土の使を入れじ」を欠いている。それは四部本、屋代本といった「平家物語」内部の異同にも見られるところであるが、始皇の死（あるいは冥土の獄卒の裁き）の拒否というモチーフにさえば、鉄の網にふれて「冥土の使を入れじ」とあるほうが、叙述としては完成した姿といえよう。それらを欠いているのは、覚一本や延慶本のような叙述に至る中間的な形態というよりは、始皇の死の拒否というモチーフが徹底しなかった表現と思われる。

また、「源平盛衰記」に「城の廻一万八千三百八十四里、北二八広サ三百里、メグリ九千里ノ鉄ノ築地ヲ高クツキタレバ、雁ノ来リ帰ル事モ叶ザリケレバ、築地ノ中ニ雁門トテ穴ヲ開タリ」とあるのは、一見「今昔」と覚一本「平家物語」との間に置いてみることができそうだ。すでに鉄の築地に變化しているものの、城の北にあるというのが「今昔」で記される長城の面影を残している。「メグリ九千里ノ鉄ノ築地」というのも、九千里という数値が巨大すぎて不自然で、かつ東西にわたるはずのものが周りを囲むかのようなあいまいな表現で、かえって「今昔」から覚一本「平家物語」への中間的な位置を示すものに見える。しかしこれも別の見方が可能だろう。実は、長城が雁の通る穴をともなつて咸陽宮を囲む鉄の築地となつた後においても、胡国の侵入を防ぐ塞として

の長城説も健在なのだ。先に引用した永濟注では、別の詩の「胡城」の注に「胡城トイハ、胡ノクニノ、エヒスヲフセク城ナリ。秦ノ始皇ノトキ、胡ノサカヒニ城ヲキツキテ、カレヲフセキシナリ」、**「関」**の注に「関ハ在境所以察出入也云々。史記伝、秦始皇令蒙恬築長城以禦胡人也云々」とある。**「源平盛衰記」**では、胡人を防ぐ長城と、冥土の使を防ぐ鉄城という二つの長城を、合理的に一つのものにしようとした、それ故の矛盾を含む表現とみることができると思う。

さらに室町時代の文献をみてみよう。謡曲**「咸陽宮」**は、「平家物語」とよく似た表現で、鉄の築地も「鉄の築地方四十里」と健在であるが、鉄の網と冥土の使のことは記されない。**「咸陽宮絵巻」**は「かんやうきうをおひた、しくひろけて、たかさ三里のやまをつきあげ、そのうへに大りをつくりて、めぐり九千里にはあか、ねのついちをつき、かんもんをひらかれたり」とし、別なところでまた「これよりきたのかたにあつて、こうくと申てえひすのこはきくにあり。しくはうていやかてもうてんをつかはして、こひとを千里のほかにおひしりそけ、永代あんらくのためにとて二万里の間にいしかきをして、胡人をふせくようかいとす」とする。二つの長城がそのまま並存するが、**「三國伝記」**でも同様に二つの長城が描かれる。いずれも鉄の網と冥土の使へに言及はない。逆に、**「三國伝記」**(巻一第二十三話「秦始皇帝求三不死薬」

事)の出典である**「太平記」**(巻二十六「妙吉侍者事付秦始皇帝事」)は、鉄(咸陽宮絵巻)と同じく「あかがね(銅)」とされる)城のみとなり、天空にむかう鉄の網も描かれるが、冥土の使にはふれない。さすがに時代がこまで下ると、鉄の築地が創造された当初の冥土の使を防ぐという意も、見失われたのではなからうか。

しかしながら、始皇の死の拒否というテーマは、彼の死と連接する大鯨魚(龍神)との格闘の話、および、不死の仙薬を求めるためにたくさんの僮男卯女を舟にのせて蓬萊の島に赴かせた話がある。こちらの話は後者が**「新樂府注」**にあるほか、「今昔」**「中山法華経寺本三教指帰注」**(「鮑厘嘆氣」注)**「太平記」****「三國伝記」**ではこの二つの話を連接して一連のものとしていて、いくつかの話を束ねて始皇説話を形成する**「今昔」****「太平記」****「三國伝記」**においては、それが分量的に大きなウエイトを占めている。**「太平記」**(**「三國伝記」**も同じ)では咸陽宮の描写に続けて、「其歎樂ヲ究給フニ付ケテモ、只有待ノ御命有限事ヲ嘆給ヒシカバ」として、蓬萊の不死の薬、龍神との格闘、始皇の死と話が展開する。始皇の死の拒否というテーマにおいてはむしろこちらの方が大きな流れで、咸陽宮の鉄の築地と鉄の網は小さな瀬なのだ。一度は咸陽宮の描写の中に死の拒否というモチーフをひそませたものの、そこでは咸陽宮の奇怪な巨大さのイメージが強烈で、死の拒否という抽象的な意味は、宮殿の圧倒的

な視覚上のイメージに飲まれてしまう危うさに絶えずさらされていたのだろう。

## 五 むすびにかえて

以上、始皇の長城の話を追ってみたが、それ自体が自立した説話として説話集に採録されることはなく、一度こそ明確なモチーフを吹き込まれながら、様々な文献に取り込まれる過程でそのモチーフが見失われ、完成された叙述を崩壊させていった小さな説話の道をたどることもできたように思う。

と同時に、小さな説話を通して、中世において様々に語られた始皇の説話を支えるモチーフの一つが明らかにされた。その現世の絶対的権力者の死の拒否というモチーフは、中世における一つの認識として伏在しながら、あるところで、「往生要集」「宝物集」あるいはそれによった唱導や学問的講釈で説かれる地獄の底の鉄城のイメージを借りて、新しい説話を生み出しもした。ここには仏教に関わる場の影響を認めてよいだろう。

さて、日本の中世における始皇の説話は、もう一つの中心に燕丹説話があり、「秦皇驚歎、燕丹之去日烏頭」という「和漢朗詠集」の句として人口に膾炙され、注釈の世界で説話としてふくらんでいったことはすでに明らかにされている。<sup>16)</sup> その燕丹の始皇に対する復讐話と、不死の仙薬を求めそ

のために鯨の怪物（龍神）と戦うところとなり、その祟りで命を落とすことになる話が、中世の始皇の説話の二本の柱とよめる。その後者の方を軸にして説話を構成するものに、「今昔」「中山法華経寺本三教指帰注」「太平記」「三国伝記」があることは前節で述べた。この二つの柱が合体した始皇説話はいまだ見出せないものの、後者の死を拒否する王というモチーフが前者の咸陽宮の描写に影響を与えたとすれば、個々の文献を越えた中世というテクストの中の始皇像がほの見えてくるようだ。ここでは、統一者、苛政者としての政治的な始皇の意味付けは副次的という感がある。

また、燕丹の復讐と咸陽宮の説話のみならず、不死の仙薬や鯨の怪物との格闘の話の方も「新楽府」や「三教指帰」といった注釈の世界に関わりを持つことを確認するにつけ、始皇の説話が「史記」から大きく離陸していくのに、注釈や唱導の力の大きさをあらためて思う次第だ。ただし、唱導や注釈で簡単にくくってしまうのは控えよう。近時の研究動向が示しているように、注釈や唱導、あるいはそれぞれの文献の成立の場の細かな実態の探索が大切であり、本稿もささやかではあるが、変容の契機を探って、中世の文献、学問や唱導講釈、人々の認識といった多様な場を浮遊する説話の位置付け、意味付けを試みたものである。繰り返し様々な文献に現れる説話について、説話を収録するそれぞれの文献の文脈で与えられる意味付けを探りつつ、それらが伝承の過程で、ど

ういう認識に支えられて骨格をなし、またどういう認識によつて変容していくのか。その具体相の追究を今後とも課題にしたいと思つてゐる。

注

- (1) 黒田彰氏「中世説話の文学史的環境」(昭和62年和泉書院中の「威陽宮覚書—朗詠注との関連—」(初出は昭和61年「文学」54—3)。
- (2) 「史記」蒙恬列伝では、臨洮から遼東まで一万余里と言われる。
- (3) 太田次男氏「釈信教とその著作について—附・新楽府略意二種の翻印—」(昭和41年「斯道文庫論集」五)。
- (4) 前掲(1)論文。
- (5) 伊井春樹氏「威陽宮の威容—「威陽宮」絵巻と説話の世界—」(平成5年「語文」60)。
- (6) 引用は新日本古典文学大系(平成3年)による。
- (7) 前掲(1)論文。
- (8) 「往生要集」の鉄城が何に依つたかは未詳。
- (9) たとえば新日本古典文学大系「平家物語」(平成3年)の注では、「冥土からの使で、皇帝の暗殺を謀る刺客を指す」とする。
- (10) 前掲(1)論文。
- (11) 黒田彰氏「中世説話の文学史的環境」(昭和62年和泉書院)中の「朗詠古注—管見—永済注について—」(初出は昭和58年「国語と国文学」60—11)。永済注の引用は、伊藤正義、黒田彰編著「和漢朗詠集古注集成」3(平成元年大学堂書店)による。
- (12) 引用は、伊井春樹氏「威陽宮絵巻(翻刻)」(平成5年「語文」60)。
- (13) 前掲(1)論文。

(おおむら・せいいちろう 親和女子高校)